宮澤賢治「貝の火」論
――権力と無縁のまなざしを取り戻すことは出来るか――

矢花　真理子

一

宮澤賢治は『注文の多い料理店』序で自身の物語について〈なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです〉と書いている。実際に『注文の多い料理店』の中にある個々の作品を読むと、たしかに不可思議な部分がたくさん出てくる。例えば、「注文の多い料理店」では、紳士たちには見えない〈扉の向うのまっくらやみのなかで〉山猫と犬たちの鳴き声だけがし、また、「山男の四月」の〈山男〉や「月夜のでんしんばしら」の〈電気総長〉など存在自体が奇体な登場人物の中でも、特に「かしはばやしの夜」の〈画かき〉は秩序らしい秩序を持たず、ひときわ異質である。賢治童話において人間の了解を越えた不可思議さは、物語に一層の奥行きを与えている。賢治は大正七年頃から童話を書き始めたが、賢治童話成立史の最も初期に位置する[1]「貝の火」からすでにその不思議さがある。

今まで「貝の火」は、伊藤真一郎が述べるように〈慢心を主題とした教訓的寓意譚[2]〉として理解されてきた。それは、ホモイが〈周囲の賞揚に酔って思い上る〉ことへの〈罰〉として失明があることを指している。ホモイの〈慢心への罰[3]〉として失明があるという因果関係で作品を理解する傾向は、現在でも続いている[4]。だが、伊藤が〈とは言え、この作品には、通常の寓意譚の概念からははみ出すところがある[5]〉と述べるように、本作品にはホモイの〈慢心への罰〉という〈教訓的寓意譚〉として理解しようとすると、説明出来ない箇所が出てくる。それは、例えば〈その子の顔を見ますと、ホモイはぎょっとして危なく手をはなしそうになりました〉という箇所である。伊藤もこの箇所に注目し〈なぜ、ここでそうしたひばりの子供の醜さ・気味悪さのことが持ち出さなければならないのか、という疑問が禁じ得ない[6]〉と指摘する。伊藤はひばりの子供の醜さを〈実はホモイ自身〉と述べるが、依然として不可解さは残ったままであると言える。更に、説明出来ない箇所はこの他にも、ホモイがもぐらいじめをしたり盗んだ角パンを持ってきたりしたにも関わらず〈貝の火〉は美しく輝いていたという部分がある。一方で〈貝の火〉は、ホモイ親子が狐に決闘を挑み鳥たちを助けたあとには、輝きを取り戻さずに、割れた。今までの先行研究では〈貝の火〉の奇体な動きについて押野武志が〈両親はホモイの慢心を責め、貝の火が曇り砕けてしまうと

注意するが、逆に貝の火は美しく輝きを増すばかりなのだ。勧善懲悪・因果応報という物語のコードだけでは本作の特質を捉えられない〔1〕と指摘しているものの、立ち入って説明したものは見られない。したがって、本作品は〈通常の寓意譚の概念からははみ出すところがある〉のではなく、〈寓意譚〉として読むことが不可能であるのではないだろうか。そこで本稿では、「貝の火」を〈寓意譚〉で理解するのではなく、作品それ自体が何を問おうとしているのかを明らかにしたい。まずは、物語冒頭にある醜い姿のひばりの子が川に流される場面から検討していく。

二

物語冒頭でホモイは、いいにおいでいっぱいの野原を一人で悦んで踊りながら歩いていると、何かが川に流されるのを見つける。ホモイは〈いきなり水の中に飛び込んで、前あしでしっかりそれを捉まえ〉る。ホモイの飛び込む行為は、〈いきなり〉とあるように瞬時になされている。ホモイは、溺れている対象が誰であるか問う以前に、同じ生き物であるからには手を届かせるのである。しかしこのあとホモイは〈ぎょっとして危なく手をはなしそうにな〉る。なぜなら、その顔が〈顔中しわだらけで、くちばしが大きくて、おまけにどこかとかげに似てい〉たからである。ホモイは、自分とは違う外見を持つ者をおぞましいと感じている。

つまり、ホモイには視ることを通じて同時に二つのことが立ち上がっている。ひとつめは、種の違いを越えて目の前の者を助けたいということ、二つめは、種を区別し見慣れない者を拒絶したいということである。語り手が〈この強い兎の子は、決してその手をはなしませんでした。怖ろしさに口をへの字にしながらも、それをしっかりおさえて〉と説明するように、ホモイの中では助けたいことと拒絶したいこととがせめぎ合っていたが、拒絶したいことよりも助けたいことの方が勝っていた。ホモイは川の流れの中で命を落とすかもしれず相手を助けられるかもわからなかったが、〈力一杯にひばりの子を岸の柔かな草の上に投げあげて、自分も一とびにはね上りました〉とあるように、相手を助け、最後まで手をはなすことはなかった。

しかし川を離れたあと、安心できる場所で改めてその顔を見ると、ホモイは〈ぞっとして、いきなり跳び退き〉、〈声をたてて逃げ〉てしまう。ホモイは相手の命を救い自分からも死が遠のいたかと思うと、また瞬時におぞましさが立ち上がってきてしまうのである。

更に、視ることに関わるホモイの行為はもう一つある。それは次の箇所からわかる。

> 南の空を、赤い星がしきりになゝめに走りました。ホモイはうっとりそれを見とれました。

この箇所でホモイは〈赤い星〉に〈うっとり見とれ〉ている。〈見とれ〉ている状態は、ホモイが〈赤い星〉の美しさに吸い込まれ、自分の輪郭線が溶け出し自と他の境が消えている状態であると言えるだろう。それは、助けようか拒絶しようかというときホモイの中で自と他が分かれていることと対照的である。加えて、〈赤い星〉は天のかなたにあるのでホモイの手が届かない。それに対し、川の中では、対象に手が届いている。以上のように、〈見とれ〉ることは、手が届かないまま自分が

融解し自と他の境が消えている点において、先の二つの状態とは異なる次元にあると言える。

〈赤い星〉にホモイが〈見とれ〉たあとに、〈赤い星〉と同じ姿をしている〈円い赤い光るもの〉が次のように運ばれてくる。

> すると不意に、空でブルルッとはねの音がして、二疋の小鳥が降りて参りました。大きい方は、円い赤い光るものを大事そうに草におろして、恭々しく手をついて申しました。

天のかなたにある〈赤い星〉は、すぐあとで〈貝の火〉と呼ばれる〈円い赤い光るもの〉と重ね合わせられている。語り手が言う〈円い赤い光るもの〉は、まだ地上で動物たちがそれを〈貝の火〉と認識する以前の呼び名である。手が届かないはずの〈赤い星〉に重ね合わされた〈円い赤い光るもの〉は、地上で動物たちから〈貝の火〉と名づけられ、宝として所有されていく。

三

ひばりの母親は、先日は〈せがれの命をお助け下さいまして誠にありがとう存じます〉、〈これは私どもの王からの贈物でございます〉と言って、〈円い赤い光るもの〉をホモイの前に持ってくる。母親はそのあと〈これは貝の火という宝珠でございます〉と言う。ひばりの母親は、息子の命を救ってくれたお礼としてホモイに〈貝の火〉を渡しに来ている。だが、〈貝の火〉は、ひばりの母親からのお礼の品としてあるだけではない。それは〈王からの贈物〉とあるように、国民を救ってくれたお礼として鳥の国の王からの賜物でもある。〈貝の火〉は、王の権力をその背景に持ってホモイに贈られている。しかも、その権力は、ひばりの母親が〈お納め下さらないと、又私はせがれと二人で切腹をしないとなりません〉と言っているように、国民の命であってもいつでも奪うことが出来る絶対的な力である。ホモイは〈貝の火〉を〈いりません〉、〈見る丈けで沢山です。見たくなったら又あなたの所へ行きましょう〉と言って断るが、ひばりの親子は〈貝の火〉を置いてあわてて飛んで行ってしまう。ひばりの親子は、ホモイにお礼を言いに来ているだけではなく、鳥の王に遣わされて賜物を必ず渡してくるという役目を負っているとも言える。

こうして獣の国にやって来た〈貝の火〉は、すでに名誉な玉であるとその存在を知られていた。ホモイの父は〈これは有名な貝の火という宝物だ〉と言い、野馬もホモイに〈こんど貝の火がお前さまに参られましたそうで実に祝着に存じまする。あの玉がこの前獣の方に参りましてからもう千二百年たっていると申しまする〉と言っている。

冒頭で見た伊藤論に代表されるように、今まで本作品は主に〈貝の火〉が持つ名誉な玉という側面に焦点が当てられる傾向にあった。しかしそれは、今確認したように、鳥の王の権力に裏打ちされたものであった。その一方で、今まで重きを置かれてこなかった〈貝の火〉が持つもう一つの側面がある。それは、〈貝の火〉を受け取った側は、〈貝の火〉の光を絶やさないように責任を負わされるということである。

ひばりの母親が〈王さまのお言伝ではあなた様のお手入れ次第で、この珠はどんなにでも立派になる〉と言っていたことや、ホモイの父親が〈お前はよく気を付けて光をなくさないように〉と言っていたように、

〈貝の火〉は手入れが要求される玉でもある。〈貝の火〉は鳥の王の権力をその背景に持つ名誉な玉であるが、光を常に失わないように出来た者だけが〈鷲の大臣のような名高い人〉になれるのである。ホモイは、父親の言葉を聞いて〈大丈夫ですよ。僕は決してなくしませんよ。そんなようなことはひばりも云っていました。僕は毎日百遍ずつ息をふきかけて百遍ずつ紅雀の毛でみがいてやりましょう〉と意気込みをみせる。だが、〈貝の火〉はこれまで〈一生満足に持っている事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あっただけ〉と父親が言っていたように、光を維持するのが難しい玉であった。その上、今まで〈貝の火〉の光を保持出来た者の中に、獣国の者が入っていないことに注目したい。〈貝の火〉の光を維持することが出来れば、獣の国も、ようやく鳥や魚の国と対等であると他国から見なされると考えられる。逆に言えば、もし光を維持出来なければ、獣の国の名誉は損なわれる恐れがある。〈貝の火〉の光を保ち続けられるかどうかは、獣国の威信にすら関わってくるのである。

四

ホモイは、皆が名誉な玉として崇め、権力を見ている〈貝の火〉を渡されたものの、はじめは〈貝の火〉をただの〈円い赤い光るもの〉として視ているようである。ホモイは〈貝の火〉が持つ自由な動きにまかせて光を楽しんでいる。

見える、見える。あそこが噴火口だ。そら火をふいた。ふいたぞ。面白いな。まるで花火だ。おや、おや、おや、火がもくもく湧いている。二つにわかれた。奇麗だな。火花だ。火花だ。まるでいなずまだ。そら流れ出したぞ。すっかり黄金色になってしまった。うまいぞうまいぞ。そら又火をふいた。

ホモイがもともと惹かれていたのは〈貝の火〉が持つ権力性ではなく、〈貝の火〉の奇体な輝きをする美しさである。ホモイが〈貝の火〉の不可思議な輝きに惹かれるのは、〈赤い星〉に〈うっとりし〉ていたときにも見られた。ホモイは、ここでも、奇体な美しさに惹かれている。

ホモイは、そのあと外に出る。そこで先の野馬に会って〈貝の火〉が獣国にまわってきた礼を言われたり、いつも一緒に遊んでいたりす達から次元の違う人だというような態度をとられたりする。ホモイは家へ戻ると母親に〈何だかみんな変な工合〉、〈りすさんなんか、もう僕を仲間はずれにし〉と言い、はじめは権力者として特別扱いされることを嬉しく思っていなかった。

しかし、のちに母親から〈お前はもう立派な人になった〉と言われると、ホモイは〈そんなら僕はもう大将になったんですか〉と言って悦んで躍りあがり、〈うまいぞ。うまいぞ〉と言う。

母親が言った〈立派な人〉を、ホモイは〈大将〉と言い換えている。大将は、人々の上に立つ存在であり、尊敬されると同時に、人々を操る存在でもある。今まで皆と仲間であることを望んでいたホモイが、自分が上に立って他を操作したいという欲望を持ったのは、なぜだろうか。それは、ホモイが〈もうみんな僕のでしたなんだ。狐なんかもうこわくも何ともないや〉と言うように、ホモイは日頃から狐が脅威であり、だからこそ、大将という立場を肯定的に捉え、力による支配に憧れを抱いていたからであると考えられる。

大将になったときにホモイが言う〈うまいぞ。うまいぞ〉という言葉は、はじめ〈火をふいた〉り〈流れ出した〉りする〈貝の火〉の奇体な輝きに見入っていたときにも登場していた。そのときホモイは〈貝の火〉が持つ自由な動きを喜んでいたが、大将となってからは、〈貝の火〉の輝きを権力を示すための手段として扱っていくことや、仲間を自分の役に立つよう操作していくことに新たな喜びを見出していることが読み取れる。

〈貝の火〉の輝きを背景に、ホモイにとって憧れであった大将という立場は現実のものとなった。ホモイは親しい順に、〈りすさんを少将〉、〈馬は大佐〉、狐を〈少尉〉にすると言う。ホモイは、自分を大将として一番上に置き、その下に〈少将〉、〈大佐〉、〈少尉〉と並べ、擬似的な軍隊を作ろうとしている。大将となったホモイは、他を序列化し組織の一番上の立場として他を操作していくようになる。

翌日ホモイは〈ふん。大将が鈴蘭の実を集めるなんておかしいや〉と言っているように、大将らしく振る舞うようになる。ホモイは、もぐらに対し〈僕、お前を軍曹にするよ。その代り少し働いて呉れないかい〉と言って命令よりも柔らかい言い方で〈鈴蘭の実を集める〉ことを要求する。しかし、もぐらは〈長くお日様を見ますと死んでしま〉うと言って、りすや仔馬のように、ホモイの要求に応えることが出来ない。ホモイはすっかり怒り、〈お前なんかいらないよ。今に狐が来たらお前たちの仲間をみんなひどい目にあわしてやるよ〉と言う。ホモイの要求に応えられない者、すなわち仕事が出来ずに役に立たないもぐらは、仕事が出来て役に立つその他多くの中から〈いらない〉と切り棄てられ、〈ひどい目にあわしてやる〉とあるように罰が科せられることになる。つまり、〈鈴蘭の実を集める〉という仕事をするという観点から、ホモイはそれが出来る者を歓迎し、他方で、出来ない者を強引に見棄てていくのである。

ホモイが大将となってからは、物語冒頭で確認した川での葛藤の際、相手を拒絶しようとすることよりもホモイの中で勝っていた、自分も助かるかわからないが相手を助けようとする優劣のない姿が背後に退いていく。その一方で、〈貝の火〉が持つ権力性を背景に、優劣を作り出し、優位な立場から仲間を支配していこうとする姿や、〈貝の火〉をホモイの権力を示すための手段として輝きを失なわせないよう扱っていこうとする姿が前面にあらわれてくるようになる。

五

大将として振舞うホモイは、序列化された組織の一番上に君臨しているかのようであるが、実は、狐に操作されていく。狐はホモイが言った〈毎日きっと三つずつ持って来ておくれ〉という要求に応え、毎日角パンを手渡す。その代りに、〈私の鶏をとるのを、あなたがとめてはいけませんよ〉と言って自分の要求を通していく。狐は、連日にわたり角パンを渡すことで権力者であるホモイを取り込み自分の意のままに操るのである。

それに対しホモイの父親は、狐と一緒になって行ったホモイの振る舞いを父の善悪の基準に従って止めさせようとする。父親は、ホモイがもぐらをおどしたことをとがめ、それを悪いことと判断している。父は、〈お前はもうだめだ。貝の火を見てごらん。きっと曇ってしまっているから〉とあるように、自身の考えを〈貝の火〉を引き合いに出してホモ

イをさとそうとする。この父親の振る舞いは、ホモイが狐の盗んだ角パンをもらって帰ってきた日も、もぐらを〈毒むし〉と名付けいじめた日も同じである。連日、箱から取り出された〈貝の火〉は父の予想に反し、美しく輝いている。それを見たホモイは、父に叱られたときの涙を忘れる。一方、父もそれ以上ホモイをさとそうとはしない。なぜ父親は、連日にわたってそれ以上さとすことをしないのだろうか。そのことを考える際、第三節で確認した〈貝の火〉を受け取った側は光を絶やさないように責任を負わされるということを改めて思い出したい。父がホモイの行いを止めさせようとしても、〈貝の火〉が光っていれば、父親の善悪の考えはその都度無効になるのである。つまり、〈貝の火〉を光り続けさせるというより大きな目的の中に、父親の善悪の考えは包み込まれている。父親がそれ以上さとすことをしないのは、〈貝の火〉が美しく輝いている限り、父親の考えよりも、〈貝の火〉が光っているかどうかが優先されているからである。

とは言え、三日目において父親は、〈貝の火〉の輝きを確認し〈黙って玉をホモイに渡し〉たあと、黙ったままではなく、〈狐には気をつけないといけないぞ〉とホモイに念を押して忠告している。それを聞いたホモイは〈たとえ僕がどんな事をしたってあの貝の火がどこかへ飛んで行くなんてそんな事があるもんですか。それに僕毎日百ずつ息をかけてみがくんですもの〉と言う。このあと父親は、ホモイの主張を前にして〈実際そうだといいがな〉と言って、それ以上は何も言わなかった。

父親は一見すれば、善悪の基準を示し、〈貝の火〉の輝きを背景にするホモイの他を操作していく姿を阻止するかのようである。しかし父親は、〈貝の火〉の名誉を守り続けるために〈貝の火〉の光をいかに維持するかということに重きをおき、〈貝の火〉を光り続けさせること自体が目的となっている。それゆえ、他を操る力は阻止されるどころか物語に温存され、ホモイを取り込んだ狐の力もまた助長していくのである。

六

狐が他を支配する力は強まっていき、それは、生存に必要な鶏を獲るという狐の野生を超えて、もぐらをいじめるという楽しみにまで広がっていく。狐は、〈もぐらを罰にするのはどうです。あいつは実にこの野原の毒むしですぜ〉と言って、ホモイにもぐらいじめを提案し承諾を得る。狐とホモイは、足を踏み鳴らしてもぐら親子を穴から追い出し〈目が見えない上に足が利かない〉もぐらたちを無理に走らせようとする。第四節でみたように、もぐらは、ホモイにとって仕事をさせるという観点では役に立たないとされていた。それに対し、もぐらいじめの場合では、もぐらはあらかじめ存在自体が否定されている。仕事をさせる場合とは異なり、狐とホモイがもぐらをいじめることは何かの目的のために行われるのではない。もぐらいじめにおいては、存在そのものが役立たずのもぐらであっても、無理に走らせればそれは面白いという他を意のままに操ることそれ自体が目的となっている。

狐は更に、他を支配する範囲を広げていき、〈今日は一つうんと面白いことをやりましょう。動物園をあなたは嫌いですか〉とホモイに持ちかける。この日は今まで使われなかった網という道具が使われる。狐は、網を使って一度に多くの異なる動物たちをつかまえ、獣の国の中では珍しい鳥たちを集めた動物園を開く。動物園を開くことによって狐は、珍しい動物たちを集めることが出来た己の権威を示すことが出来ている。

ついに、主催者である狐こそが、大将であったホモイにかわって真の権力者に君臨したのである。

ホモイが狐につかまった鳥たちを助けようと硝子箱をすぐ開こうとすると、狐は〈ホモイ。気をつけろ。その箱に手でもかけて見ろ。食い殺すぞ。泥棒め〉と、まるで口が横に裂けそうなくらいにどなる。真の権力者となった狐を前にして、ホモイは怖くなってしまい、鳥たちを置いてその場から逃げる。

ホモイは一目散に家へ帰るが、〈貝の火〉が入った蓋を開けてみると、それは燃えているものの、〈針でついた位の白い曇りが見え〉、それが取れない。

夜中にホモイが〈貝の火〉を見ると、〈もう赤い火は燃えてい〉なかった。ホモイから狐の網のはなしを聞いた父は〈お前はいのちがけで狐とたたかうんだぞ。勿論おれも手伝う〉と言う。今まで父親は、〈貝の火〉を引き合いに出し、ホモイをさとそうとしていた。しかし、〈貝の火〉は父親の予想に反する輝き方をし、父親の考えが説得力を持つことはなかった。〈貝の火〉がくもったことは、父親の考えに今度は説得力を持たせることとなる。

ホモイの父親は〈さあ決闘をしろ〉と言う。〈貝の火〉に後押しされて狐との決闘の現場まで来たホモイ親子であるが、父親がホモイに発していた〈お前はひばりの子供の命を助けてあの玉を貰ったのじゃないか。それをお前は一昨日なんか生れつきだなんて云っていた。さあ野原へ行こう〉という言葉からは、ホモイ親子が〈貝の火〉の存在を忘れていると言えるのではないだろうか。狐と直接力を闘わせることは、鳥たちを助けるために命がけで狐と闘うというものである。狐と兎が闘った場合、どちらが勝つかわからない。このとき、優劣を作り出し、優位な立場から他を操作する力が強まっていた物語に、冒頭であらわれていたにも関わらず後景に退いていた力が再び前に出てくる。それは、ホモイが川の中で共に流され、自分も死ぬかもしれないがとにかく何者かを助けたいという種を越えた優劣のない力である。狐に決死の闘いを挑むことで、ホモイ親子はそれまで〈貝の火〉に裏打ちされていた優位性を棄て、自分達も死ぬかもしれないがとにかく鳥たちを助けたいという種を越えた優劣のない力を発揮したのである。こうして、ホモイ親子は〈貝の火〉から独立した。

父親が決闘を申し込んだあと、狐は箱をかついで逃げ出そうとする。ホモイの父が止めようとすると、狐は硝子箱を置いたまま逃げて行く。狐が闘わずに逃げて行ったことは、狐が常に優位の立場におり、最後まで対等の立場に降りることをしなかったことのあらわれであると考えられる。

ホモイ親子は鳥たちを箱から解放することに成功する。鳥たちを助けたあと、狐に決闘を挑んだ時には忘れられていた〈貝の火〉のことが、ホモイ親子に再び思い出されてくる。鳥が皆地面に手をついて礼を言うと父親は、〈私共は面目次第もございません。あなた方の王さまからいただいた玉をとうとう曇らしてしまったのです〉と言う。父親は、鳥たちを家に案内する。その途中で、梟が〈大股にのっそのっそと歩きながら時々こわい眼をしてホモイをふりかえって見〉ていたことや、ホモイの家に着いてからも〈目玉を途方もない方に向けながら、しきりに「オホン、オホン」とせきばらいをし〉ていたことは見逃せない。梟は、鳥の国が保持出来た〈貝の火〉を、獣の国が最後まで保持出来るのか疑がっていると考えられる。たくさんの鳥たちは、ホモイの家に入って〈貝の火〉の様子をみる。

ホモイ親子は鳥たちを助けることに成功したが、〈貝の火〉は輝きを取り戻さない。そればかりでなく、父親が〈「もうこんな工合です。どうか沢山笑ってやって下さい。」と云うとたん、貝の火は鋭くカチッと鳴って二つに割れ〉る。父とホモイが命がけで狐に闘いを挑み、鳥たちを助けることに成功したにも関わらず、なぜ〈貝の火〉は最後に割れてしまったのだろうか。

ここで、〈貝の火〉の光り方を、曇る前と後とで今一度振り返ってみたい。まず〈貝の火〉は、第三節で確認したように、名誉な玉であったが、その一方で、受け取った側は〈貝の火〉の光を絶やさないように責任を負わされる玉でもあった。ホモイが大将となってからは、ホモイにとって奇体な美しさそのものとしてあった〈貝の火〉の輝きは、ホモイの権力を示すための手段として使われていくようになる。〈貝の火〉の光が維持されているときは、その輝きを背景にしたホモイの権力も維持されている。しかし、狐が動物園を開くことで真の権力者となり支配の頂点に君臨し、それまで大将と呼ばれていたホモイがその場から逃げたときに、〈貝の火〉は曇る。そのあとホモイと父は、狐に決死の闘いを挑むことで優劣のない対等な地平に降り立ち、〈貝の火〉に裏打ちされていた優位性を棄てた。父親が鳥たちに頭を下げる姿は、ホモイ達が〈貝の火〉から切り離されたことを明らかにしている。〈貝の火〉はホモイ親子が優劣によらない力を発揮したのを見届けるかのように、〈二つに割れ〉る。〈貝の火〉が割れたことによって、ホモイ親子がそれまで重きを置いてきた〈貝の火〉を光り続けさせるという目的そのものが完全に消滅したと考えられる。このように、〈貝の火〉の光り方を曇る前と後とで確認すると、ホモイが狐から逃げたときに転換が起こっていた。狐に決闘を申し込んだとき、ホモイ親子は優劣のない対等な地平に降り立ち、それまで〈貝の火〉に裏打ちされていた優位性を棄て、〈貝の火〉から自立していったのである。〈貝の火〉が割れるということと、ホモイが権力性から離れていくまでの過程とは重なっていると考えられるのではないだろうか。

粉になった〈貝の火〉は、〈二つかけらが組み合って、すっかり昔の貝の火になる〉。そのあと〈貝の火〉が〈玉〉とあることに注目したい。賢治は最後、〈貝の火〉を〈貝の火〉以前のただの〈円い赤い光るもの〉に戻したのだと考える。〈玉はまるで噴火のように燃え、夕日のようにかがやき、ヒューと音を立てて窓から外の方へ飛んで行〉った。言い換えれば、〈円い赤い光るもの〉に戻った〈貝の火〉は、何も意味づけされないどこか別の場所へ飛んで行ったのである。

第二節で確認したように、ホモイが〈うっとり〉見とれていた〈赤い星〉と、〈円い赤い光るもの〉とは重ね合わされていた。ホモイが〈赤い星〉と同じように奇体な美しさそのものに見とれていた〈貝の火〉の輝きは、ホモイが大将となってからは、ホモイの権力を示すための手段として輝きを失わせないよう扱われていき、権力の象徴に成り下がってしまっていた。光を維持しようとすることに重きが置かれてきた〈貝の火〉であるが、本来の〈貝の火〉の状態は、〈赤や黄の焔をあげてせわしくせわしく燃えているように見えますが、実はやはり冷たく美しく澄んでいる〉と語られるように、光るように見えるが実は光らないのがほんとうの状態であった。つまり〈貝の火〉は、天のかなたにある星々の輝きを反射しているだけだったのである。

奇体な輝きを持つ〈円い赤い光るもの〉に対し、地上では権力性と光を維持しようとすることという本来の姿とは異なる意味を与えたことによって、他を支配していくことの優劣を軸とした一連の事態が起こって

いた。とすれば、先行研究において主な傾向であった失明に至るまでの展開をホモイの〈慢心〉という言葉でまとめるよりも、むしろ本作品を通じて明らかにしなければならないのは、ホモイに権力欲が形成されていくその過程にこそあったのではないかと考えられる。

しかし、賢治童話の不可解なところは、物語は〈円い赤い光るもの〉が輝きを取り戻しどこかに飛んで行くだけでは終わらないことである。〈貝の火〉の砕けた粉はホモイの目に入り、ホモイは〈まったく物が見えなくな〉ってしまう。賢治は、ホモイから目の機能そのものを奪うのである。

〈貝の火〉が持つ奇体な輝きは、視ることを通じて、美しさゆえに、地上ではその美しさが権力の素晴らしさと容易に結びついてしまっていた。一方で、同じように視ることを通じて、ひばりの子が持つ見慣れない奇体な外見は、見慣れなさゆえにおぞましさや拒絶を呼び起こしていた。川での葛藤の際ホモイは、ひばりの子に対し拒絶したいことよりも助けたいことの方が勝っていたが、たとえ最初ホモイにこの姿が貫かれていたとしても、奇体なものを視ることから始まる憧憬や拒絶には、優劣を軸とした権力欲の契機へと、容易になりかわる可能性が潜んでいるのである。ホモイから目の機能を奪うことは、憧憬と拒絶のまなざしとが持つ優劣そのものを抹消させた。しかし、同時に〈円い赤い光るもの〉にただ〈見とれ〉ることをも奪うことになった。父は、ホモイに〈泣くな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかったお前は、一番さいわいなのだ。目はきっと又よくなる。お父さんがよくしてやるから。な、泣くな〉と言う。この父の言葉はいかにも頼りない。だが、父親の言葉からは、奇体なものそれ自体を美しいと感じる、権力とは無縁のまなざしを取り戻すことは出来るかという賢治のせめてもの願いが込められていると言えるのではないだろうか。

※本稿におけるテクストの引用は、すべて『【新】校本宮澤賢治全集第八巻』（筑摩書房、平7・5）に依拠する。その際ルビを省略し、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

注

（1）天沢退二郎は、賢治童話についてその大部分が、〈草稿にも制作年月日に当るものが記されておらず、数少い日付の付されているものについても、およそ前述したように賢治の作品が重要な加除や改稿改作を何ヵ月・何年にもわたって施されるために、その日付がテクストのどの段階に当るのかは不明である。しかしさまざまな証言や状況証拠から、校本・新修両全集とも童話篇の冒頭に並べている「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」「貝の火」の三篇の、少くとも或る形態が、賢治童話成立史の最も初期に属することはほぼ確かなようである〉と述べている。（天沢退二郎・栗原敦・杉浦静編『図説宮澤賢治』、筑摩書房、平23・5）

（2）伊藤真一郎「貝の火――作品の外と内の、二つの発見」（「國文學解釈と教材の研究」、學燈社、昭57・2）

（3）前掲2

（4）続橋達雄「『貝の火』」（「国文学解釈と鑑賞」、至文堂、平12・2）、押野武志「贈与と交換のエコノミ――「貝の火」論」（「国文学解釈と鑑賞」、至文堂、平21・6）など。

（5）前掲2

（6）前掲2

（7）前掲4